

# 頭頸部癌におけるラミニン，Ⅲ型コラーゲン，フィ ブロンネクチンの分布およびラミニン染色様態による 悪性度評価

著者	鈴木 守
号	2640
発行年	1994
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/21031">http://hdl.handle.net/10097/21031</a>

氏 名 (本籍)

すず  
鈴

木

まもる  
守

学位の種類

博

七

(

学

学位記番号

医

第

2 6 4 0

号

学位授与年月日

平

全

2

3

## 学位授与の条件

学

第

条

該

最終學歷

昭

34

3

5

東北大学医学部医学科卒業

學位論文題目

# 頭頸部癌におけるラミニン，Ⅳ型コラーゲン，フィブロネクチンの分布およびラミニン染色様態による悪性度評価

(主 查)

論文審査委員

教授

高

坂

知

市

教

森

昌昌

造

教授 高 橋

高

樁

故

## 論 文 内 容 要 旨

本論文では頭頸部扁平上皮癌における細胞外基質ラミニン，IV型コラーゲン，フィブロネクチンの分布を免疫組織染色 ABC 法にて観察し，特に癌胞巣周囲のラミニン陽性度と臨床病期，組織学的所見，生存率との関係について検討した。癌組織において癌胞巣周囲および血管基底膜にラミニン，IV型コラーゲンの染色がみられたが，癌胞巣周囲について正常上皮のように連続性に染色される例，ところどころ染色の欠落がある例，全く染色がみられない例があり，染色性はさまざまであった。フィブロネクチンは正常喉頭粘膜および癌組織において間質との境界部に強く染色されたが，間質にも繊維状に一樣に染色された。ラミニンは症例によって染色様態がさまざまであったためラミニンの染色様式を次の3群に分類し臨床的悪性度，角化度，浸潤様式との関係を検討した。

正常型：癌胞巣周囲のラミニンがほぼ連続性にみられるもの。

断裂型：癌胞巣周囲のラミニンは断裂し部分的にみられるが癌胞巣周囲の50%以上の部分に染色がみられるもの。

消失型：癌胞巣周囲のラミニンの染色部分が50%未満のもの。

その結果を下記に示した。

- ①原発巣の大きさとラミニン染色型には統計学的有意差はなかった。
- ②リンパ節転移とラミニン染色型については断裂型，消失型でリンパ節転移，リンパ節再発の率が有意に高かった。
- ③遠隔転移については断裂型と消失型，特に消失型に遠隔転移が有意に多くみられた。
- ④角化度の強い癌で正常型の比率が有意に高かった。
- ⑤浸潤様式とラミニン染色型には統計学的有意差はなかった。
- ⑥5年生存率はラミニン正常型で67.2%，断裂型で52.1%，消失型で31.0%であった。
- ⑦転移リンパ節とその原発巣の比較では原発巣と同じラミニン染色型に分類された例が多かった。リンパ節転移巣では癌胞巣が固有の間質をもつ部分ではラミニンの染色が胞巣周囲に強くみられたがリンパ組織に直接接している部分では染色の低下がみられた。

以上より頭頸部扁平上皮癌組織におけるラミニン染色様態の観察はリンパ節転移，予後の予測に有用と考えられた。

## 審 査 結 果 の 要 旨

鈴木論文では、癌の悪性度や予後と相関する免疫組織化学的パラメーターのひとつである細胞外基質成分ラミニン、IV型コラーゲン、フィブロネクチンの分布を観察し、頭頸部扁平上皮癌組織における陽性度と臨床病期、組織像、生存率との関係について検討している。

まず正常粘膜における分布については従来の報告のとおり上皮細胞と間質の境界部すなわち基底膜にはほぼ連続性に染色された。また、血管基底膜にも強く染色された。しかし、陰性コントロールでは全く染色されなかった。癌組織においても癌胞巣周囲および血管基底膜にラミニン、IV型コラーゲンは認められたが、その染色性はさまざまであり腫瘍先進部では癌胞巣周囲のラミニンが断裂、消失する所見がしばしばみられた。フィブロネクチンは基底膜ならびに間質に繊維状に染色され頭頸部癌に特徴的な所見は無かった。

これらの所見と臨床的・組織学的悪性度との関係を調べると、ラミニン染色では35例の正常型中17例がT1T2であり、断裂型では18例中3例、消失型は13例中4例がT1T2症例となり有意差はないが前者に比して後者の異常染色型でT1T2例の少ないことが証明された。Nについても正常型に比して異常染色型で高頻度に認められ、有意水準2%で有意差があった。また治療前ステージI、IIの19例に限ってリンパ節再発の割合をみるとラミニン正常型15例では1例に、異常型では4例全てに再発を生じた。遠隔転移についてはラミニン消失型に最も多発していて正常型と異常型の間に有意水準5%の差を認めた。なお、5年生存率でも正常型と消失型の間に有意水準5%で有意差を認めた。組織像との関係では低分化癌でラミニン断裂型、消失型が多く見られたが浸潤の程度との相関は弱くまた炎症所見との関連も明確ではなかった。

以上のように、鈴木論文では頭頸部扁平上皮癌について免疫組織化学的に検討し、臨床との関連において他の癌と同様に解釈できるものから必ずしも一致しない所見まで、さまざまな新知見を得ている。今後は細胞間接着分子の発現や各細胞の活性など未知の分野を開拓することによって頭頸部癌の特異性をさらに鮮明にしていくことが可能になると思われる。よって、本論文は学位論文に値するものと判定する。